

特集「ソフトウェア工学」の編集にあたって

高田 眞吾^{1,a)}

現代社会はソフトウェアの上に成り立っている。ソフトウェアがきちんと動作している間はその存在をほとんど意識しないが、故障したりすると個人レベルのみで困ることもあれば、大きな社会問題に発展することもある。新しい技術の出現や既存技術の急激な発展により、ソフトウェアで可能なことが広がっている反面、今までになかった問題も出てきている。このような状況下では、今まで解決できなかった問題だけではなく、新たに出てきた問題、これから起こるであろう問題に対処できることが求められる。これがまさにソフトウェア工学に期待されていることである。産業界の問題をタイムリーに取り上げ、理論研究に基づくソフトウェアの基本原則を導き出し、再び産業界へフィードバックしてその有効性を検証する必要がある。近年のソフトウェアを取り巻く環境の変化が速く、産業界の問題点も研究成果の有効性もダイナミックに変化する。したがって、密接な産学連携での研究を通して、高い実践的有益性にてその研究価値を高める必要がある。

情報処理学会ソフトウェア工学研究会では、シンポジウム、ワークショップ、研究発表会等を主催し、ソフトウェア工学に携わる産学の研究者、ソフトウェア開発に携わる技術者・実務者等へ広く参加を呼びかけている。本特集号もこれらの活動の一環として企画したものである。

本特集号は、ソフトウェア工学に関連した研究開発全般について、最新の研究成果や開発事例に基づく知見等を幅広く掲載することを基本方針とした。さらに、通常の論文投稿だけでなく、ソフトウェア工学研究会主催のソフトウェアエンジニアリングシンポジウム 2017 (SES2017) に採録されたシンポジウム論文 (フルペーパー) の投稿を推奨し、シンポジウムの査読結果が反映された質の高い論文を集めることで、優れた研究成果をシンポジウムだけではなく、論文誌での発表を通じて素早く社会にフィードバックすることを目指した。このソフトウェアエンジニアリングシンポジウムとの連携は、2011 年から継続して行っている取り組みである。

本特集号には 20 編の論文の投稿があり (うち取り下げ 1 編)、ソフトウェア工学分野の専門家による厳正な査読

と 2 回の編集委員会、さらに 2 回の臨時編集委員会での慎重な審査を経て、最終的に 12 編 (採択率 60%) を採択した。編集委員会では情報処理学会の論文査読方針に沿い、採録となる機会がアップするように「条件付採録」とできる場合には条件の明確化に努めた。条件付採録の論文は改定箇所と方法を明確に示したことで、改定後論文の質が向上した。惜しくも採録に至らなかった論文に対しても今後の改訂の指針となるように査読コメントを提示するよう努めた。コメントを参考に改訂・再投稿されることを期待している。採択された論文は、要求定義、分析・設計、コーディング、テスト、保守といったソフトウェア開発の各工程を対象にしており、可視化、コードクローン、モデリング、エンピリカルな調査など様々な視点から行った研究をまとめており、多様な論文を収録することができた。

最後に、本特集号に投稿いただいた会員の皆様、本特集号の機会を与えていただいた論文誌編集委員会、多忙にもかかわらず丁寧な査読や議論にご尽力いただいた特集号編集委員と査読者の皆様に深く感謝する。

「ソフトウェア工学」特集号編集委員会

- 編集長
高田眞吾 (慶應義塾大学)
- 編集委員 (五十音順)
鵜林尚靖 (九州大学), 大平雅雄 (和歌山大学), 亀井靖高 (九州大学), 菊地奈穂美 (沖電気工業), 立石孝彰 (日本 IBM), 長谷川勇 (スクウェア・エニックス), 丸山勝久 (立命館大学), 吉田則裕 (名古屋大学), 浅井信吉 (会津大学), 野中 誠 (東洋大学), 石尾 隆 (大阪大学), 伊原彰紀 (奈良先端大), 福田浩章 (芝浦工科大学), 阿萬裕久 (愛媛大学), 位野木万里 (工学院大学), 岡野浩三 (信州大学), 岸 知二 (早稲田大学), 小林隆志 (東京工業大学), 権藤克彦 (東京工業大学), 齋藤 忍 (NTT), 坂田祐司 (NTT データ), 沢田篤史 (南山大学), 田原康之 (電気通信大学), 丹野治門 (NTT), 野田夏子 (芝浦工業大学), 花川典子 (阪南大学), 吉村健太郎 (日立製作所), 鷲崎弘宜 (早稲田大学)

¹ 慶應義塾大学理工学部
Faculty of Science and Technology, Keio University,
Yokohama 223-8522, Japan

^{a)} michigan@ics.keio.ac.jp